生徒が意欲的に取り組む歴史学習の工夫
～ 資料の効果的活用を通して ～

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 41
Ⅱ　研究の仮説 …… 41
Ⅲ　研究の全体構想図 …… 42
Ⅳ　研究の内容 …… 43
　1．新しい学力観について …… 43
　2．学習意欲について …… 44
　3．意欲的に学習に取り組む態度を育てる指導の基本的な考え方 …… 45
　　(1)　研究の充実 …… 45
　　(2)　意欲を喚起する学習状況の設定 …… 45
　　(3)　生徒の考えや行動を認めてあげる …… 45
　　(4)　生徒の変容を敏感に捉え適切に対応する …… 45
　4．生徒が意欲的に学習に取り組む態度を育てる学習展開の工夫 …… 45
　　(1)　学習課題を明確にする …… 45
　　(2)　意欲的、主体的学習の指導過程の工夫 …… 46
　5．意欲的な学習態度を育てる具体的な手立て …… 46
　　(1)　生徒に見られる意欲的な学習活動 …… 46
　　(2)　望ましい学習課題 …… 46
　　(3)　良い発問とは …… 47
　　(4)　効果的な板書の仕方 …… 47
　　(5)　ノートの取らせ方、使い方 …… 47
　　(6)　話し合いのさせ方 …… 48
　6．学習指導過程の工夫・改善 …… 49
　7．社会科における資料のあり方 …… 50
　　(1)　社会科における学習資料 …… 50
　　(2)　資料の分類と特性 …… 50
　　(3)　資料の精選と教材化 …… 51
　　(4)　指導過程における資料の位置づけ …… 51
　8．資料活用能力の育成 …… 51
　9．ワークシートの工夫及び活用例 …… 52
Ⅴ　授業実践 …… 53
Ⅵ　研究の成果と今後の課題 …… 60

宜野湾市立真志喜中学校
真志喜　得　敬

＜社会科＞

生徒が意欲的に取り組む歴史学習の工夫
～ 資料の効果的活用を通して ～

宜野湾市立真志喜中学校　教諭　真志喜　得　敬

I　テーマ設定の理由

21世紀を目前にひかえた今日、我が国は高度な工業技術や情報化、国際化の急速な進歩による物質的な豊かさの中で、人々の生活様式や価値観が多様化している。こういう社会状況のなかで出された新学習指導要領は、これからの学校教育においては変化の激しい社会において、生涯を通して自ら主体的に学び続け、たくましく生き抜いていくための基礎となる力、即ち自己教育力の育成の重要さを求めている。

中学校社会科の目標は『広い視野に立って、我が国の国土と歴史に対する理解を深め公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う』ことを目指している。

このことは、広い視野からさまざまな社会事象をとらえ、科学的な社会認識のもとに現実の諸問題に主体的に対応できる能力、即ち社会的な思考力、判断力、創造力、表現力、情報活用力など新しい学力観に立った社会科の能力の育成をねらいとしている。

歴史的分野においては、歴史的な見方や考え方などの科学的な歴史認識を身につけ、**目標（5）『具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味や関心を高め、さまざまな資料を活用して歴史的事象を多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を育てる』**と示されている。従ってこれからの授業は学習の仕方をしっかり学ばせ、生徒一人一人の学習に対する興味や関心を喚起させ、自ら学習課題をもって意欲的に追究するような授業改革が、生涯学習体系が求めている自己教育力の育成につながると考える。

ところで、これまでの授業における生徒のようすを見ると

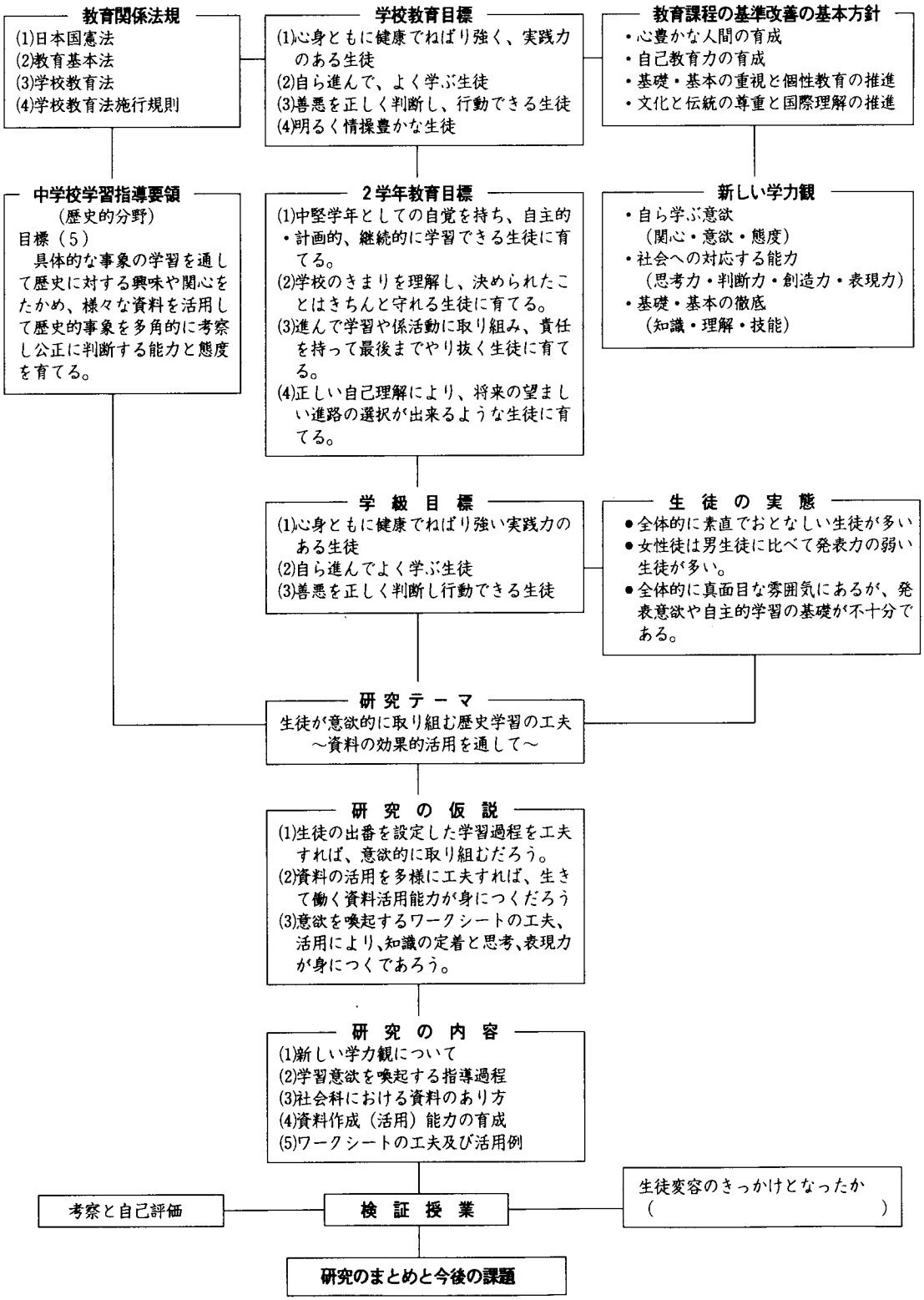
- 学習のしかたが身についていない生徒が多い。
- 資料の読み取りが浅く、社会的事象の把握の弱い生徒が多い。
- 歴史学習は暗記教科だと思い込み、思考を嫌う傾向が強い。

このような現状を前にし、生徒の主体的・意欲的な取り組みの学習の工夫が足りなかったと反省する。授業の成立条件には生徒の興味・関心を高め学習意欲の喚起を図る教材・教具の開発や作成、資料の収集と活用の工夫は学習効果を高める上で大きな役割を果たすものである。社会科における歴史資料は、単に数値的な読み取りのみならず、そのことから資料の背後に潜んでいる当時の社会的事象や人々のくらし、願いなどを読み取る社会的思考力・社会的判断力を育成することが社会科における資料活用能力と考える。さらに読み取る資料活用能力だけでなく、生徒自身が資料を作成し発表するという活動的場面を設定することでより意欲的になり表現力も身につくであろう、と考え本テーマを設定した。

II　研究の仮説

1．生徒の出番を設定した学習過程を工夫すれば意欲的に取り組むだろう。
2．資料の活用を多様に工夫すれば、生きて働く資料活用能力が身につくだろう。
3．意欲を喚起するワークシートの工夫・活用により知識の定着と思考・表現力が身につくだろう。

III　研究の全体構想図



Ⅳ　研究内容

1．新しい学力観について

(1)　今、求められている新しい学力

教育は、子供一人一人の人間としての望ましい成長を目指して行われるものである。つまり、子供一人一人が生涯にわたって主体的、創造的に生きていくことができる資質や能力を育てることが教育であり、この資質や能力こそが、これから育成すべき新しい学力である。今回改訂された学習指導要領の総則「教育課程編成の一般方針」のの前段の部分に示されている**「自ら学ぶ意欲」**と**「主体的に対応できる能力」**の二つが、これから育成すべき学力の柱であると考えることができる。そして、この二つの学力を中核ととらえる考え方が、「新しい学力観」といわれるものである。

この学力観は、これからの社会の変化に主体的に対応できる能力や創造性の基礎を培うとともに、生涯学習の基礎を培う観点から、自ら学ぶ意欲と主体的な学習のしかたを身につけることをねらいとしている。

そのためには、授業を進めるにあたっては創造性の基礎となる論理的な思考力、判断力、表現力、創造力等の育成を、学習指導の中核に据えるといった考え方、即ち、新しい学力観に立つ学習指導の展開が望まれている。

ここで、**学力を構成する四つの要素**についてまとめてみると下記のように考えられる。

学　力
- **学ぼうとする力**……興味・関心・意欲など
- **学ぶ力**……学び方、考える力、的確に判断する力、豊かに表現できる力
- **学んで得た力**……分かったこと（知識・理解）、できたこと（技能）
- **学んで得たものを応用する力**……応用する力、創造する力、行動できる力

学習指導を通して以上の四要素を身につけさせることが大切である。

(2)　社会科における新しい学力観

社会科教育のねらいは、社会についての正しい認識を育てるとともに、社会のさまざまな問題や事態に対処していく実践的な態度を育てていくことにある。

今日、国際化や情報化が進展するなかで、社会の変化に主体的に対応し積極的に社会に働きかけていく能力・態度や豊かな表現力、創造性をもつ生徒が求められているのは前述のとおりである。そこで、授業においては生徒一人一人に目を向け、生徒が主体的、意欲的に取り組む授業を創造するために

① 社会科教育のねらいを再認識すること

社会科をあくまで人間形成の一端を担う教科として位置づけ、知識、理解のみでなく、主体的な態度の育成を図ることを基本的なねらいとする教科であることを再認識する。

② 中学校社会科と新しい学力観との関連について考えること

- 従来の知識・理解を中心とした学力観から、関心・意欲・態度を重視した学力観への質的転換を図ること。
- 生徒が社会的事象を意欲的に追究するための活動を十分確保すること。
- 社会的な思考・判断を通して社会的事象から課題を発見すること。
- 生徒自らの資料収集・読み取り・加工・作成や発表・報告を行うこと。
- 問題解決的な学習過程を重視すること。

以上の学力に対する見方や考え方がこれからの新しい時代に即応した学力観として

捉えることが大切である。

2．学習意欲について

(1) 学習意欲とは

教師は、だれでも生徒が学習意欲をもって授業に臨んでほしいと願いつつ、日々、授業実践をしている。生徒自らが学習しようとする意欲が生じれば、自覚的な学習活動が起こり学習効果も上がるであろう。

学習意欲という言葉は、必ずしも明確に定義されてはいない。意欲については「何かを求め、また、そうしたいと思う心の働き」などと定義されている。しかし、学習意欲といった場合、単にそうしたいと思う心の働きが自分から起こっている状態を指すだけでなく、そうした動機の目指す目標を実現しようとする意志の働きをも含むものと考える。つまり、いろいろな動機の中から、学習しようとする動機を選択し、それを実現しようとする心の働きである。言い換えれば、**学習意欲とは、「子供が学習しようとする気持ちと、それをあくまで実行しようとする意志とを含んでいるもの」**と考える。

(2) 学習意欲の動機づけ

学習意欲を喚起することを教育心理学では「動機づけ」とよんでいる。

動機づけの方法には、内発的動機づけと、外発的動機づけの二つの分け方がある。

内発的動機づけは、生徒の内面から起こるもので興味や、関心、好奇心等を呼び起こして学習意欲を促す方法である。この場合は、学習に強い関心を抱かせ、面白いから、あるいは目標を達成したいから学習するなどと、学習活動そのものを促し高めるものである。

一方、**外発的動機**づけは、賞罰や、競争等のように外からの刺激によって学習意欲を喚起させる場合である。外発的動機づけを続けると、ほめられたいから勉強する、叱られたくないから勉強する、ということのみが先行してしまい、逆にいえば、ほめられないと勉強しない、叱られないと勉強しないという好ましくない傾向を生み出すことになる。従って動機づけは、外発的動機づけから内発的動機づけに転化させるようにすることが大切である。

(3) 授業の中で意欲をどう育てるか

生徒に学習意欲がなければ、授業は沈滞化し、従って学習効果も上がらない。

学習意欲をどう育てればよいか、松本浩毅氏は、「学習意欲を育てる社会科授業」の中で「生徒は、どのような授業のときに学習意欲が起こるか」についての調査結果（宇都宮大学教育学部付属中学校の生徒）を次のような観点からまとめている。

教　　材	生徒に理解しやすい内容、生徒の興味や関心をそそる内容、教師の体験談や身近な内容などを教材化すること

学習形態	調査や作業的な学習を取り入れること、講義や説明の中にも生徒に考えさせる場を十分与えること、生徒が積極的に発表する場を与えること、グループ学習を取り入れること
学習方法	地図、年表、統計資料、ＯＨＰ、スライド、写真、ビデオ資料など各種の資料を活用した授業の工夫、板書の工夫、ノートを十分に活用した授業の工夫

上記の観点から授業を続ける中で、生徒が学習に興味を示し、意欲的、継続的な学習の取り組みが出来ると考える。教師は常に生徒の良さと可能性を信じて話しかけ、絶えず目標と課題をもたせ、成就感の喜びを味わわせながらほめてやり、自信をつけて激励することが大切である。

学習意欲は、生徒のやる気であるから、日ごろの教師と生徒の信頼関係を十分に図り、また、生徒の好ましい相互関係を築き、認め合い、励まし合える学級の雰囲気を作っておくことが大切である。こういう中では、生徒の学習意欲も高まり、学習効果も上がるものと考える。

3．意欲的に学習に取り組む態度を育てる指導の基本的な考え方

(1) 研究の充実

- 授業の目標を明確にし、何をどう教えるかを明確に捉える。
- 教科書の内容を組み直し、どう意欲的に取り組ませるか。
- 教材、教具の開発による興味、関心の高揚。
- 資料や課題提示したときの生徒の反応を予測しておく。

(2) 意欲を喚起する学習状況の設定

- これから何を学習するか明確に意識化する（学習価値の必要性を認める）。
- 学習課題はより身近かな、多少の困難を必要とする自力解決の可能なもの。
- 課題解決のための十分な時間を与え、ゆっくり思考させる場を与える。
- 教師の意図に合った反応だけを取り上げ、処理してしまわないようにする。

(3) 生徒の考えや行動を認めてあげる

- 教師の計画した授業の流れに固執し過ぎないで、予想外の生徒の反応も大切にする。
- 生徒の自主的な学習を大事にしながら、重要な価値のあるものに気づかせていく。

(4) 生徒の変容を敏感に捉え、適切に対応する。

- 生徒の努力による進歩を認め、励まし、ほめる。
- どう教えるかという点だけに傾注するのではなく、生徒の変容を的確に感じとる感性を磨く。
- 生徒一人一人の発言や学習活動を大切にし、肯定的に評価してあげる。

4．生徒が意欲的に学習に取り組む態度を育てる学習展開の工夫

(1) 学習課題を明確にする。

・事前学習内容の掌握につとめる。
・授業のねらいや内容を生徒に明確に意識化させる。
・発問の工夫にもつとめる。
・教材（素材）の適切な選択や地域素材の教材化を工夫する。

(2) **意欲的、主体的学習の指導過程の工夫**

課題（目標）設定　**学習計画**（予想・仮説）　**学習活動**（課題解決）

前時の学習を生かして、学習課題を明確にする → 仮説や予想を立て学習の見通しを立てる → 資料を活用して学習し、その結果を記録、話し合い、学習を深める →

評価・修正　**まとめ**（目標達成）

学習課題を見つめ直して評価し、まちがいを修正する → 学習のまとめをし、次時の学習へとつなげる

5．意欲的な学習態度を育てる具体的な手立て

(1) **生徒に見られる意欲的な学習活動**

・何をどうしたいのか、という課題をしっかりとらえている。
・課題（問題）を解決するための方法や見通しを立てている。
・自分なりの方法で解決のための活動ができる。
・解決したことを発表したり、他人の方法、考え方と比較したりして異同を明きらかにしたり、それぞれの良さを見いだすことができる。
・解決のための方法、考え方、答えのまとめ、整理をすることができる。
・自分の解決活動（学習活動）を振り返ることができる。

(2) **望ましい学習課題**―――（意欲的に学習させるための要件）

ア　指導のねらいが達せられるもの
・関心・意欲・態度、科学的思考、技能・表現、知識・理解等、それぞれのねらいが達成できるもの

イ　興味・関心を喚起できるもの
・生徒の発達段階や学級の実態に合わせ、生活に身近かな課題の設定
・知的好奇心を喚起するような課題の設定

ウ　生徒自ら、解決方法や解決の見通しが立てられるもの
・教師がいちいち指示しなくても、自ら取り組める課題

エ　個に応じた、そして同時に多面的な見方で解決できるもの
・生徒一人一人、考え方、方法、表現の仕方が違う。

オ　成功感や成就感、満足感の味わえるもの

・適度な困難さをもった課題を解決したとき、次の課題への意欲が湧く。

カ　解決した後、次の課題が見えてくるもの

・学習は連続しており、一つの課題を解決したら、そこから新たな課題が見えてくるようでなければならない。

(3)　良い発問とは

①　主発問と補助発問

ア　主発問は学級全体に対して

・課題を捉えさせる。

・話し合いの観点をはっきりさせる。

・まとめてどうするか、を考えさせる。

イ　補助発問はねらいに応じて、学級全体に、グループ又は個人に

・主発問に至るまでの生徒の意識、気持ちを高める。

・主発問の意味を全員が捉えたか調べたり、的確に捉えさせたりする。

・個人個人の思考過程において、悩んでいる生徒に助言し、解決方法に気づかせる。

・話し合いの場で、話し合う観点について気づかせる。

②　一人一人の実態に応じて、多様な答えが得られるものであること

・一つの発問に対して、複数の答え（反応）が返ってくるような、多面的に考えられる発問

③　何をしたらよいか、どう考えたら良いかということが生徒に分かりやすいものであること

ア　主発問も補助発問も生徒の実態を十分考慮して用意する。

イ　既習事項や既有の経験・体験を活用させるような発問に心がける。

(4)　効果的な板書の仕方

①　課題が明確に捉えられるようにする

ア　フラッシュカードや小黒板を用いて、取り外しできるようにしておく。

イ　学習の途中で再提出して、課題確認ができるように工夫する。

②　他人の考え方が分かりやすいようにする

ア　フラッシュカードなどを利用すると、移動して、同じ考えを集めたり、対比したりできる。

イ　板書しておくと発表の内容からその根拠などについて話し合わせやすい。

③　まとめを明示する

ア　生徒の発表や言葉を取り入れて、学習の成果を整理する。

イ　内容を色分けして整理する。

(5)　ノートの取らせ方、使い方

①　ノートを取る意義をしっかりつかませる。

ア　ノートは自分の学習の進め方が分かるものであること。

イ　後に、活用できるものであること。

② 意欲的・主体的な学習を進めたノートの取り方

ア　問題に対する自分の最初の考えが見えること

- ノートは自分の学習の記録であることを自覚させる。
- 自分の考えを書く時間を与える。
- 机間指導しながら適切な助言を与える。
- 色鉛筆の使い方などの工夫もさせる。

イ　他人の考えに出会ったとき、どう考えたか記録されていること

- メモを取りながら、話し合い記録する習慣をつける。
- 特に良い意見、考えを記録させる。
- ノートの取り方、使い方は一人一人違うものであり、創意工夫が必要であることを意識させる。
- 学習の内容がまとめられており、反省や感想も記録させるようにする。
- 時々、点検して教師のコメント等を書いてあげる。
- 手本になる生徒のノートをＯＨＰ等で紹介する。
- ワークシート形式の場合は、ノートに貼りつけられるような工夫が必要である。
- 問題だけ貼らせて、記述はノートを利用させる方法もある。

(6) 話し合いのさせ方

① 学習課題をしっかり捉える

ア　具体的な課題は、生活と関連させるようにする。

イ　抽象的な課題は、これまでの学習と関連させ、さらに何が分かればよいか働きかける。

② それぞれの考え方を理解させるようにする

ア　ＴＰシートや画用紙などを使って、自力解決の段階で発表の準備をさせる。

イ　できるだけ多くの生徒に発表の機会をあたえる。

ウ　板書したりして、話し合いを焦点化する。

エ　考えの根拠を明らかにさせ、自分の考えに自信を持たせたり、不十分な点に気づかせたり、他人の考えの良さを指摘させたりしていく。

(7) 生徒の考えの認め方、ほめ方……それぞれの場で的確に評価

① 個人思考の段階や机間指導の中で、考えや考え方をほめたり、助言を与えたりする。

② みんなの前で発言できたことや、さらに次の観点で、話し合いの中からほめる。

ア、既習事項や経験・体験を活用しているか

イ、教科のねらいである価値観に向かって進んでいるか

③ 間違っていても、全面的に否定するのではなく、正しい根拠の部分を見抜くようにする。

④ 生徒のつぶやきにも耳を傾け、適切な場面ですぐほめる。
（考えを方向づけるようなものでも良い）

(8) 授業のまとめ方

教師がまとめる方法、話し合わせてまとめる方法、個人個人でまとめさせる方法があり、本時の学習の実態に応じて扱い分ける。

いずれにしても、学習を振り返る時間は大切であり、大体次のような観点でまとめさせたい。

① 学習課題を振り返って、新しく分かったことをまとめさせる。

② 自分の考え方、方法と他人との異同などを中心にまとめさせる。

③ 自分の考え方、方法などがどのような場合に使えるか、又、類似問題を作らせたりして発展的にまとめさせる。

④ 本時の学習で分かったことについて、学習の仕方やこれからの自分の学習について今後どんなところに役立てたいかなど、個人の学習感想（関心・態度）をまとめさせる。

6．学習指導過程の工夫・改善

指導過程	指導形態	生徒の活動	教師の活動	指導上の留意点
課題把握 ・動機づけと課題提示	一斉指導	・学習の全体を見わたす。 ・今日の授業の課題（ねらい）をしっかりつかむ。 ・何が分かればよいか、何を調べるかをとらえる。 ●生徒の意識 ・不思議だ、おもしろい ・なぜだろう ・知りたい、調べてみよう	・学習への興味や意欲を喚起する。 ・課題意識を持たせる。	・具体物を提示したり演示実験等で興味・関心を高め、学習意欲を喚起する。 ・課題を十分把握させる。
計画 ・仮説や予想を立て、学習の見通しをたてる。	個別指導 ・学習コース用課題別学習 A.B.Cコース	・必要な知識を呼び起こす。 ・既習の知識から学習の見通しを立てる。 ・調べるべき点（学習のねらい）を明確にする。 ・どんな方法で、どこから調べていくかを考える。 ●生徒の意識 ・こうではないだろうか ・こんな方法で調べてみよう	・どういう結果になりそうか、どういうことが言えそうか、これまでの体験、知識等をもとに予想や仮説を立てさせ、学習の計画（見通し）を立てさせる。	・既習の知識から仮説や予想を立て、学習の方法を考えさせる。 ・見通しの立てられない生徒には、ヒントや助言を与える。 ・生徒の多様な考えに対応できるような教材・教具の準備や時間の考慮
検証（課題解決） ・道すじを整え資料活用、観察・実験等を通して課題を解決していく	個別指導 一斉指導 グループ指導	・解決すべき課題をはっきりとらえ、計画に沿って課題を解決していく。 ・課題解決の途中で疑問点の発見と計画の見直し。 ●生徒の意識 ・予想した通りだった ・やはりそうだったのか ・予想外だ、なぜだろう ・他の方法（資料）で調べてみよう	・解決方法を明確にさせる。 ・多くの資料を活用させる。 ・具体的操作、体験等をできるだけ多く取り入れさせる。 ・ブックトーク等で参考図書（資料）の紹介もする。	・解決に行き詰まった生徒には、具体物の操作等で助言する。 ・いろいろな方法で課題解決させる。
確認 ・発表 ・修正	一斉指導 個別指導	・調べた点をはっきりさせる。（まとめる） ・調べたことを考察し、規則性、法則性を考える。 ・他の人の結果を参考にして自らの結果を考察し直す。 ●生徒の意識 ・考察しよう ・みんなに報告（発表）しよう ・他の人（グループ）はどうなっているだろうか ・もう一度考えてみよう	・調べたこと、分かったことをまとめさせ、効果的に発表させる。 ・できるだけ、多くの生徒に発表させる。	・一人一人の生徒の発表を大事にしてあげる。 ・いろいろな考えを出させて話し合わせる。 ・考えたこと、調べたことを作図したり、作表、グラフ化させたりして、説明、発表させる。
まとめる ・ふりかえる ・形成評価 ・チャレンジ学習 ・遅れがちな生徒への対応や発展学習	一斉指導 個別指導 グループ指導	・これまでの知識体系と比較する。 ・自分の知識体系に組み入れる。 ●生徒の意識 ・なるほど、分かった ・そんなこともあったのか ・よし、次は～しよう	・学習して分かったこと、気づいたことをまとめさせ、次時の学習へとつなげる。	・生徒のまとめたことから、一般化する。 ・練習問題等で習熟・定着を図る。 ・形成評価等による遅れがちな生徒や進んでいる生徒の発見 ・補習、発展学習への対応 ・家庭学習への課題の提示

7．社会科における資料のあり方

(1) 社会科における学習資料

社会科の学習は、社会的事象を具体的に把握することで社会生活を理解するものであるが、すべてが直接に観察できるものではない。社会的事象を総合的に捉えることができるように、直接に観察できない社会的事実・事象に関しては、作り替えて、間接的な観察ができるようにしなければならない。言わば、見えないものを作り替えて、見えるように教育的に配慮したものが学習資料である。学習資料は、学習目標を達成するために用いられるもので、収集・選択・作成を通して活用され、学習を効果的に進めるための補助的材料である。社会的事象を分析・総合・意味把握のための実証の手がかり・裏づけになるものと言える。

(2) 資料の分類と特性

学習に使われる資料の分類とその特性を把握しておくことは、資料を効果的に活用するために大切なことである。

種　類	例	特　　性
文章資料	教科書、副読本、参考書 資料集、事典、年鑑、雑誌 新聞、パンフレツト、民話 生徒作文、伝記文学作品	・くり返し読むことができ、事象の背景、推移がつかめる。 ・新聞、雑誌などは、新しい情報が得られる。 ・文字を読むことに抵抗感を持つ子が多い。
視聴覚資料	スライド、写真、掛け図 ビデオ、テレビ、映画、 ＯＨＰ、ラジオ、録音テープ、生徒の絵（作品）	・学習への興味、関心をおこさせ、学習意欲を高める。 ・事象をイメージ化しやすい。 ・臨場感を持つことができる。 ・具体的で、細かい観察ができる。
統計資料	図、　表、　グラフ、 年表 地図、　絵地図	・社会事象の関連がつかみやす、分析、統合することによって傾向性がつかめる。 ・地図は、事象の分布や広がり、位置を捉えやすい。
現物資料	地域環境、遺跡、遺物、 民具、現在社会で使用中の 実物、　標本、　模型、 観察記録	・観察することで、具体性があり、確実性親近感が湧く。 ・多様な思考を引き出す材料となる。 ・五感を通して感じ、操作活動につながる。

(3) 資料の精選と教材化

数多くの資料の中から、学習目標や生徒の能力に適したものを選び出し、それを学習過程に位置づけたときに資料は教材として価値を生み出し効果的な学習指導が行われる。

資料を精選し、教材化するための留意点として

- 学習への興味・関心を起こさせ学習のねらいに即していること
- 生徒の能力に即し、理解しやすく、内容が具体的であること
- 問題を発見し、学習の糸口が見いだせるような資料であること
- 資料の出どころが確かで信頼性があること
- 生徒と共同の手づくり資料をより多く取り上げること等があげられる。

(4) 指導過程における資料の位置づけ

社会科における学習過程は問題解決の過程であり、資料によって生徒に知的葛藤を起こさせ、社会の見方、考え方を育成するような学習指導が大切である。そのためには、指導過程と結びついた資料の活用が工夫されなければならない。

① 導入時における資料

- 学習への興味・関心を引くような資料
- 本時学習の内容がイメージ化される資料
- 生徒の既成概念をゆさぶる資料
- 事実や事象をつかみ、何が問題であるかが見い出せる資料

② 展開時における資料

- 知識、理解が深められる資料
- 問題解決の方法を見つけ、考えることのできる資料
- 常識的な見方と矛盾する資料（否定資料）や類似資料等生徒の思考を深める資料

③ 終末時における資料

- 資料を再提出し「もっと調べたいことはないか」等と発展、応用へと導く（資料の見直し）
- 本時学習のまとめに役立つ資料

8．資料活用能力の育成

資料活用の技能

(1) 平素から資料に親しむ

歴史的分野の目標に「様々な資料を活用して歴史的事象を多角的に考察し公正に判断する能力と態度を育てる」と示されているが、その求められる力として資料を適切に収集、選択しそれを効果的に活用する。そのため、地図や年表を読みかつ作成すること、観察や調査等の結果を整理し、発表したり、討論したりすることなどを挙げている。資料を効果的に活用させるためには、平素から資料に親しませることが大切である。資料に親しませるためには、意識的に資料に接することに関心をもたせ、それが意味のあることであるとか、楽しいことであるということを生徒に実感させること

が必要である。また、教師が意識的に適切な資料を提示し、生徒に考えさせる習慣をつけることが平素から資料に親しませることになる。

(2) **資料を多角的に考察する**

一つの資料を一義的に見るのでなく、多角的に考察する態度を身につけさせたい。例えば、新聞記事等についても、書かれたものもそのまま鵜呑みにするのではなく、他紙の記事と比較したり他人の考えはどうか、疑問に思う点などを調べて自分なりの考えや意見・主張などが身につけられるよう多角的に考察する態度が必要である。一般に、古代史のように資料の数が少ない場合、多角的に資料を考察しようとするときには、多くの場合限られた資料をどう解釈するか、というような見方の多角性が必要とされる。一方、近・現代史の学習においては、資料の数が多くなり、資料そのものの見方に加えて、多くの資料の中から適切に選択し考察することが多角的な見方にとって必要となる。

(3) **情報を選択する能力が大切**

現代の情報化社会の中で、多くの情報の中から適切な情報を選択し、自分の判断を下していくことは極めて大切なことである。これは情報に対する心構えと、実際に情報を扱う経験の中から育つものである。

9．ワークシートの工夫及び活用例

学習法の一つとして、あるいは教師の働きかけの工夫としてワークシートの活用が考えられるが、その基本的なあり方は次のように考えられている。

〈ワークシート学習について〉

ワークシートは

(1) 一人一人の学習を保障し、楽しく学ばせ得るもの

(2) 一人一人に応じ、その能力を発揮させ、自信をつけるもの

(3) 一人一人のペースに合わせて学習を進めるためのもの

(4) 一人の学習を全体交流の場に生かし、相互啓発し合うもの

(5) 一人一人の活動内容を把握し、個別指導や次の学習の方向、手順を考察するための重要な資料となるもの

ワークシートは、本来、学習を個別化し、一人一人を伸ばし学習を楽しく展開させるためのものである。従ってそれは、子供の主体的な活動を促し、子供の実態に合わせた独自なものでなければならない。換言すれば、多様な創意工夫に満ちたシートを作成し、また改善されていくことが必要である。

新たな発見や追求を手助けし、思考や想像を触発するワークシートの開発が望まれる。子供や生徒の発達段階や、教科、学習内容や目標のちがいによってワークシートの形式・内容も当然、工夫されなければならない。

そこで、本時学習におけるワークシートの活用例として、「慶安の御触書」を中心に据え、学習主題『農民のくらし』を、基本的事項をおさえながら全体の流れを構造的に把握できるよう図化してみた。（P．59）

V 授業実践

社会科学習指導案

平成８年７月12日（金）　３校時

真志喜中学校２年１組　男子18名、女子18名

授業者　　真志喜　得　敬

１．単元名　第４章　近世日本と世界の動き

２．単元構成

① 世界の動き（６時間）
② 武士の全国統一（４時間）
③ 江戸幕府の成立（５時間）
⑤ 幕府政治の動揺と町人文化（６時間）

- 徳川家康(1)
- 勤勉と粗食（農民のくらし）(1)……本時
- 身分できまる職や家(1)
- 朱印船の活躍(1))
- 出国・帰国の禁止(1)

３．中単元（江戸幕府の成立）の目標

江戸幕府を開設した徳川家康はその支配体制を整えるために諸大名を軍事的に掌握するとともに、内政、外交の両面にわたって基礎的諸制度の整備を進めていった。

先ず、内政面では諸藩の大名の統制や強固な身分制度の形成、さらに種々の規制の下においた農村、農民の支配のあり方に心をくだいた。これらの事項を具体的に学習させることで、幕藩体制の基本的骨組みやこの時代の社会の構造や特色を理解できるようにする。次に、外交面では、禁教と貿易制限の強化の過程を総合的に捉えさせることによって、鎖国政策が幕府権力の確立と支配体制の強化を意図したものであったことを理解させるとともに、この政策が江戸時代の社会に及ぼした影響について考えさせる。

４．中単元の指導内容

時	中項目	学習目標	学習内容	指導上の留意点
1	徳川家康	・江戸幕府による統治が２６０年余にわたって続いた理由を考える。	●江戸幕府の成立 ①江戸幕府のしくみ ②大名に対する統制政策 ③朝廷・寺社の統制政策	諸政策を細かくきり離して学習させるのでなく、幕藩体制という大きなしくみを確立するための政策であることを理解させる。
2 本時	勤勉と粗食	・江戸時代の農民の生活のようすをつかみ、農民に対する幕府の統制の厳しさをとらえる。	●農民のくらし 江戸時代の村のしくみ 農民の負担(年貢労役) 農民に対する統制 （慶安の御触書）	農民の生活を具体的に学習することで、農民に対する幕府や藩の統制のきびしさを理解させる。
3	身分・できまる職や家	・江戸時代の身分制度がどのようなものであったかということを具体的に理解し、身分制度をつくった幕府の意図を考える。	●江戸時代の身分制度 士・農・工・商 ｜ えた・ひにん	身分制度は豊臣秀吉の太こう検地や兵農分離の基礎の上に確立され、江戸時代は身分制度を基礎とした社会であることを理解させる。

4	朱印船の活躍	・江戸時代初期の対外関係を、貿易とキリスト教の広まりという二つの観点からとらえる。	●禁教の強化と島原の乱 ①朱印船貿易と日本町 ②キリスト教の広まりと禁教の強化 ③島原の乱	・ヨーロッパ諸国のアジア進出と関連づける。 ・幕府が禁教を強化し、鎖国に至った過程について考えさせる。
5	出国・帰国の禁止	・江戸幕府の鎖国政策を幕藩体制の確立、強化という点から理解し、鎖国がその後の幕府に及ぼした影響について考える。	●鎖国 ①鎖国下の対外貿易 ②鎖国の影響	・鎖国政策が貿易面、諸外国との情報などの統制という一面と、鎖国の影響についてプラスとマイナスの両面に着目させる。

5．本時の学習計画

(1) **題材名**……「農民のくらし」

(2) **題材観**

江戸幕府は幕藩体制を維持、強化するために、士・農・工・商というきびしい封建的な身分制度を確立し農民は農業に専念させられた。「農は国の本なり」といわれ、農業は国の最も重要な産業であり、**農民は年貢の納入者として幕藩体制の財政基盤を支えているため、幕府や諸藩はいかに農村を維持し支配するか、そのためにさまざまな法令にって農民を完全に掌握することに大きな配慮を図った。**武士の生活を支えるためには、農民を巧妙に統制しなければならず、そのため**「・・・百姓は死なぬように、生きぬように・・」**（昇平夜話より）**という幕府の命題の下に勤勉と粗衣・粗食を強いられた。**ここに幕府の統治観（農民観）があった。

(3) **本時の目標**

幕藩体制を支える基盤が農民の生活にあることを「慶安の御触書」の資料を通して気づかせることにより、幕府の農民支配体制の意図を理解させる。

(4) **授業の仮説**

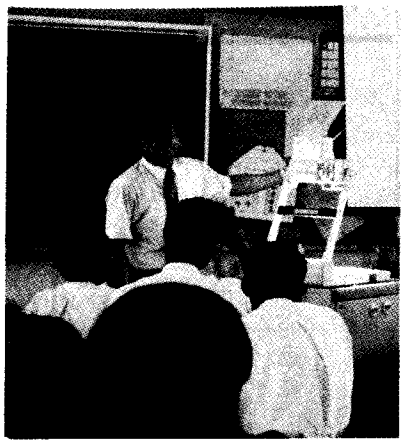
① 「慶安の御触書」を読み、自らを農民の立場に置き換えることによって農民の気持ちを浮き彫りにつかむことができるであろう。

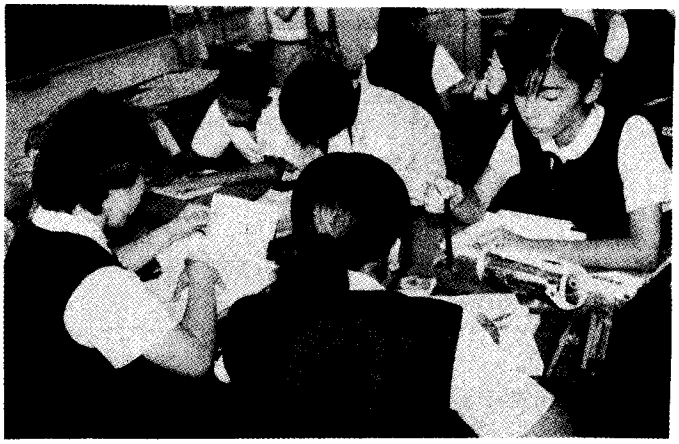
② 農民の生活を巧みに統制することによって、幕藩体制が年貢収奪による経済基盤の確立をめざしていることを、資料を通して教師の適切な指導の下でグループ学習すれば幕府の意図が主体的に理解できるであろう。

6．授業過程

本時に入る前に、事前学習として題材名に即した学習課題の統一テーマを設定した。そのテーマに沿った学習課題を教師が複数用意し、各グループにいくつかの課題の中から一つ自由に選択させ下表のように取り組ませた。

テーマ〔江戸時代の武士の経済を支えた農民は、どのような支配をうけ、どのような生活をしていただろうか。〕				
班名	学習課題	調べる内容	班長名	資料等
5	検地について調べよう	・検地とは何か。 ・検地のねらい ・検地帳には何が記録されているか ・その他		
1	農民はどのような負担を背負わされていたか	・本途物成・年貢の割合 ・小物成について ・助郷役について		
6	幕府や藩はどのようなしくみをつくって農民を支配しただろうか	・農民支配の村のしくみ ●本百姓・水呑百姓 ●村役人 ●五人組制度について （図化してみよう）		
3	農民の衣・食・住について調べよう	・どのような着物をつけていたか ・日常の食物はどうか ・住居の様子について ・頭髪について		
4	農民は、日常どのような労働をしていただろうか	・一日の労働内容 〔朝の労働は 昼の労働は 夜の労働は〕 ・四季の労働内容 （春・夏・秋・冬）		
2	農民はどのような助け合いをしてくらしていたか。また、農民の慣習や年中行事について調べよう。	・共同作業による助け合い ・村の共同的な慣習 ・年中行事について		





6．授業過程

過程	学習内容	教師の活動	生徒の活動	資料	留意点	評価
前時の既習内容	・検地と年貢 ・農民の労役 ・農村のしくみ ・農民のくらしと助け合い ・年中行事	・事前に調べたことをグループ単位で発表させ、教師が補足する。 （前時に学習を済ませたので本時では省く）	学習課題の発表 （グループ代表）	古文書 参考書など	他グループの発表を静かにしっかり聞くようにさせる	関心
導入	検地と年貢	検地から年貢納入までの過程を具体例を使って説明する。 （復習程度にとどめる）	静かにしっかり見る	TPシート（OHP）	TPをよく見て説明を聞き、アウトラインをつかませる	関心 意欲
展開		**江戸時代の経済を支えた農民は、どのような支配をうけそして、どのような生活をしていただろうか**				
	「慶安の御触書」にみる農民生活の統制	農民の立場になってこの御触書を読んでどんなことを思いますか	「御触書」の読み （生徒1人） ・各自、思ったことを自由にノートにまとめる （発表する）	資料①「慶安の御触書」	・特に、重要な所を3～4ヵ条抑えておいて読ませる。 ・各自、しっかり目を通させる。 ・思ったことをかざらずに素直に書かせる	関心 表現
	農民の心情	農民は本当はどんなくらしをしたいと思っていただろうか	●各グループで話し合いまとめて発表 （2班・6班）		・机間指導により適切なアドバイスで話し合いに参加させる	思考 関心
		農民の本当の気持ちだけに頼った生活をすると、世の中はどうなると思いますか	●各グループで話し合いまとめて発表 （1班・5班）	資料②「農民の支配に関する資料」	・机間指導でアドバイス	思考 判断 表現
	幕府の農民観	幕府はこの御触書によって、農民をどのように支配しようとしただろうか 「百姓は死なぬように、生きぬように」とはどういう意味か	●各グループで話し合いまとめて発表 （3班・4班）	資料③教科書	・発問の意味がしっかり受けとめられるように説明する	思考
まとめ	幕府の財政を支える農民	御触書のねらいは何か	板書事項をノートにまとめる	要点をしっかりつかませる		

資　料　①

慶　安　の　御　触　書

一、朝は早起きをし、草を刈り、昼は田畑を耕し、夜は縄をなって俵を編み、しっかり仕事をすること。

一、酒、茶を買って飲まぬこと。妻や子も同じこと。

一、屋敷の周りには竹や木を植え、その枝や落ち葉を燃料にして薪代を節約せよ。　　。

一、肥料のため便所は大きくつくり、雨水が入らぬようにせよ。田畑の境には大豆・小豆を植えよ。

一、百姓は、良い悪いを判断する分別もなく、未来についての考えもないものだから取り入れの秋になると、米や雑穀を妻子にたっぷり食べさせてしまうが、いつも一月、二月、三月の頃の気持ちを持って食べ物を大切にせよ。麦・粟・稗・菜・大根そのほか何でも雑穀を作り、米を多く食いつぶさぬように心がけよ。
飢饉の時のことを思い出せば、大豆の葉、小豆の葉、芋の葉など無造作に捨ててしまうのは実にもったいないことである。

一、男は田畑で働き、女房は機織りをして夫婦で夜なべをして稼がねばならない。美人の女房でも、夫を大切にせずお茶ばかり飲み、見物などして遊び歩くことの好きな女房は追い出してしまえ。

一、百姓は、麻と木綿以外は着てはいけない。

一、タバコはのんではいけない。これは食べ物にもならず、時間も金もかかるし、火事のもとになる。すべてにおいて損するもとになる。

一、……年貢さえ納めてしまえば、百姓ほど気楽なものはない。このことをよく心得て子や孫代々に伝えよ。しっかり農業に励め。

（32ヵ条からなる触れ書きの一部である）

慶安二年二月二十六日

資　料　②

農民支配の政策に関する年表

年	主　な　出　来　事
1623	五人組制度をはじめる
1628	農民の衣服に絹の使用を禁止　（麻・木綿に限る）
1633	●寛永の大飢饉がおこる
	●全国の農村の実情を調べる
1642	●農民に米を食べることを制限する
1643	田畑の売買を禁じる　（田畑売買禁止令）
1649	●慶安の御触書（農民の生活の心得）を出す
1666	農民が着る衣服の染物を禁止
1667	許可なく田畑にたばこの栽培を禁じる。

〈各グループで話し合ってまとめよう〉

農民は本当はどんなくらしをしたいと思っていただろうか。

- こんな苦しい生活から解放されて自由に遊んでくらしたい。
- 休みのある生活をしてのんびりくらしたい。
- もっといいくらしがしたい。

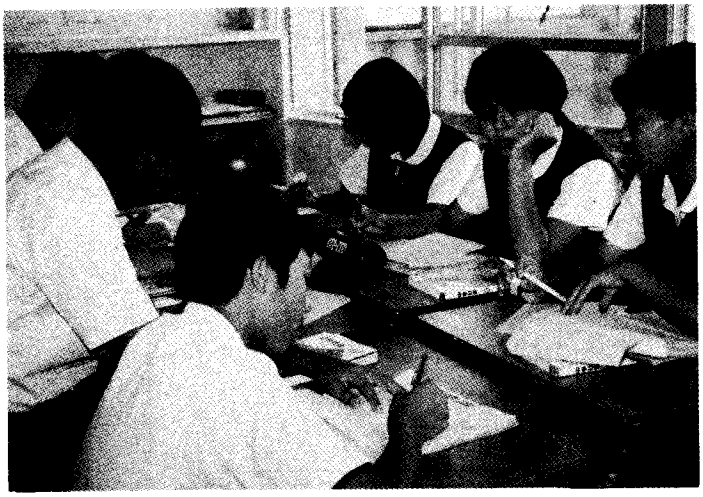
農民の本当の気持ちだけに頼った生活をすると、世の中はどうなると思いますか。

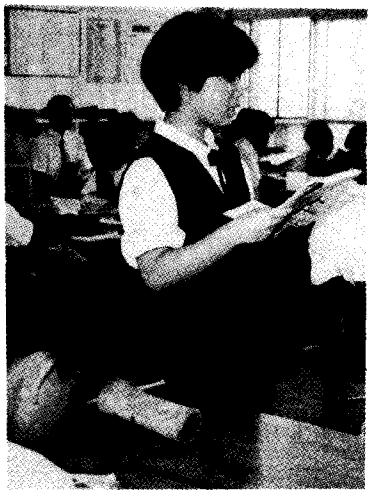
- 好き勝手なくらしを続けると、世の中が乱れていく。
- 農業をなまける人が増え、田畑が荒れていく。
- 農民がなまけて年貢を納めなくなると、幕府の収入が減って政治がやっていけなくなる。

幕府はこの御触書(おふれがき)によって農民をどのように支配しようとしただろうか。

- 農民を幕府の思うように支配し、うんと農業に精を出させようとした。
- 農民ががんばって働けば、年貢が多く取れ幕府の収入も増えて経済も安定する。

※上記の各問の回答は、生徒の答えを教師が集約したものである。





〈ワークシート〉

〔農民のくらし〕

慶安の御触書を読んで分かったこと

- 農民を＿＿＿＿＿＿……（禁止や制限が多い）
- 農業の＿＿＿＿教えてる……（＿＿＿を使え・＿＿＿＿を植えよ）
- ぜいたくを＿＿＿＿＿
- しっかり農業に＿＿＿＿＿＿

なぜ、こんなに農民の生活を統制するか

慶安の御触書（1649）

→農民は＿＿＿や藩に＿＿＿を納めている

↓

農民なしでは　　はつぶれる

↓

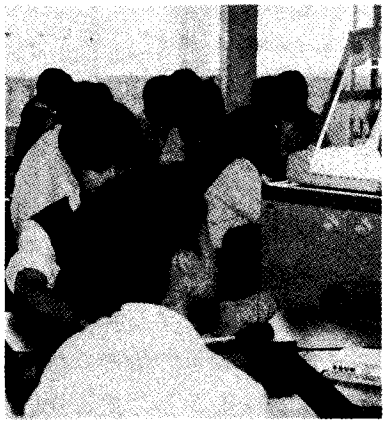
だから

→＿＿＿に都合のよいように巧みに農民を統制して＿＿＿を徴収

農民は＿＿＿＿＿＿の経済を支える大事な役割

↓　↑

「百姓は死なぬように、生きぬように」考えて年貢をとれ（家康）



＜板　書＞

今日のまとめ

「百姓は死なぬように、生きぬように」

（1649）

幕府 ― 慶安の御触書 ― 生活を巧みに統制 → 農民

（しっかり働かせて　年貢を確実に徴収）

年貢を納入

（五公五民・四公六民）

↓

幕藩体制の経済を支える

Ⅵ　研究の成果と今後の課題

歴史学習でのわかる授業をめざし、生徒が意欲的に取り組む学習の一つの手立てとして資料の効果的活用について研究を進めてきた。授業においてはこれまでの教師中心の一斉授業から少しでも抜け出し、生徒が自ら考え活動し発表できる場をできるだけ設定しようとつとめてきた。

生徒が興味・関心を寄せ授業に意欲を示す有力な要因の一つに、適切な資料や教育機器の効果的な活用があげられる。それらを適切かつ計画的、継続的に授業に展開して行けば、生徒の学習意欲や学習効果も高まるであろう。

1．成果

- 授業における調べ学習の発表で、これまで人の前で発言の少なかった生徒がグループ代表でよくまとめて発表できた。
- 資料の効果的活用のためにＴＰシートの作成と内容精選の工夫につとめた結果、生徒が興味を示して見入り、学習内容の理解を早めるのに功を奏した。
- フラッシュカードを用いた段階で生徒の発言内容を取り上げて板書したのは、生徒のより高い関心や自信にもつながった。
- ワークシートも、授業の流れの全体把握や歴史事象の相互関連の理解に役立つことができた。
- 学習効果の実をあげるためには、資料の工夫と活用、教材の開発・作成、教育機器の活用等の果たす役割の大きさをしっかり認識する必要があることを痛感した。

2．課題

- 学習課題の設定とグループによる課題解決学習
- 教育機器の適切かつ多用化した授業の工夫
- 資料の収集と再編成及びノート活用の工夫
- ゆさぶりのある社会科授業の工夫

今回の研修の成果を踏まえ、今後はさらに教師としての自己研修と自己成長をめざし、上記の課題とその学習理論の研究を続け日々の授業実践に生かしていきたい。

〈主な引用・参考文献〉

- 松本浩毅　（代表）　学習意欲を育てる社会科授業　明治図書　１９８６年
- 山極　隆　著　「新しい学力観に立つ授業と評価の手引」　明治図書　１９９３年
- 篠原照雄　著　中学校歴史の学習課題づくり　明治図書　１９９４年
- 佐伯真人　著　中学校社会科歴史の授業改善　明治図書　１９９５年